

島根大学研究見本市

研究テーマ名 フランスの農村におけるシチズンシップ形成の研究
A Historical Study of the Formation of Citizenship in French Rural Society

研究者紹介

槇原茂 (教育学部・教授)
Shigeru Makihara (Faculty of Education, Professor)

概要

フランス革命以降の農村社会で、シチズンシップ(市民権)がどのように定着していったかについて研究してきました。ここで言うシチズンシップは、市民のアイデンティティや実践も含む広い意味で使っています。『近代フランス農村の変貌—アソシアシオンの社会史—』(刀水書房, 2002)では、19世紀を中心に扱いました。現在は20世紀前半のフランス中部ブルボネ地方を主なフィールドとしながら、住民の間で経済格差や人口流出などの問題がいかに認識され、彼らが地域社会や国の政治をどのように変えていこうとしたのかを研究しています。

In this study, I examine the genesis of citizenship in rural France after the French Revolution. The term "citizenship" in this study is generic, referring to not only civil rights, but also the identity and practice of citizen-agencies. Since the publication of *Kindai-Furansu-noson no Henbo* (A Social History of Associations in French Rural Society of the Nineteenth Century) in 2002, I have investigated, in researching the Bourbonnais region of the first half of the 20th century, the development of social consciousness among rural inhabitants, particularly regarding economic hardships and the rural exodus, and their attempts at social change at both the national and local levels.

特色 研究成果 今後の展望

【特色】 日本でも制度と実態のギャップはいたるところで見られますが、大革命の伝統を誇り民主主義の先進国を自任するフランスでも同様でした。普通選挙制など民主制の制度化によって、その担い手たる市民も一気に誕生したわけではありません。市民の権利や規範、市民意識はさまざまな経験を通じて時間をかけて定着してきました。本研究では、とくに農村における結社・組合の歴史を調査しながら、この問題を検討してきました。

【成果】 前掲書の他、福井憲彦編『アソシアシオンで読み解くフランス史』(山川出版社, 2006)、松塚俊三・安原義仁編『国家・共同体・教師の戦略—教師の比較社会史—』(昭和堂, 2006)、歴史学研究会編『由緒の比較史』(青木書店, 2010)等

【今後の展望】 現在、他大学の研究者7名とともに「市民の自分史」をテーマにして共同研究を行っています。エゴドキュメント(手紙、日記、自伝など自分を語る史料)から読みとれる個人の経験を通じて、日、仏、独、英、米、墨、ソ連のシチズンシップの歴史を比較考察しています。いずれ成果を出版したいと考えています。



20世紀初めの農民の手紙

キーワード

フランス、農村、シチズンシップ、エゴドキュメント、自分史

リンク

<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/staff/staff78.html>